

オオチャイロハナムグリについて*

高橋 寿郎

オオチャイロハナムグリ *Osmoderma opicum* Lewis はやゝ中型のコガネムシである。日本特産種でその個体数はそれ程多くないが日本全国に広く分布しているようである(北海道には記録が無く、屋久島産のものは若干相違すると)。兵庫県でも戦前から騒がれたコガネムシである。この虫に関して分布を中心とした小文を発表させて頂きたい。

本種は G. Lewis により "Notes on a new species of *Osmoderma* and a *Trichius* from Japan" と題する論文 (Wien Ent. Zeit. VI, Heft. 2, p.4, 1887) の中で中禅寺、日光、今市産 3 ♀ 標本によって *Osmoderma opica* と記載された種である。さらに同年 Lewis は "On the Cetoniidae of Japan, with Notes of new Species, Synonymy and Localities" と云う論文を発表 (Ann. Mag. Nat. Hist., XIX(5)) その中で (p.199) 本種を記録すると共に Harold が Hoffmann 博士が東京で採集したものを *O. barnabita* Motsch. として記録している (Deut. ent. Zeint., xxii, Heft. i, p.12, 1877) のは多分この種のことであろうと記している。Lewis は 1879 年に "A Catalogue of Coleoptera from the Japanese Archipelago" を発表しているがこの中では *O. barnabita* のみを記録している (p.14, No.1024)。



オオチャイロハナムグリの国内分布図

* 兵庫県甲虫相資料・168.

1887年のSchönfeldt, H.v.の“Catalog der Coleopteren von Japan”の中でも *O. barnabita*, Tokio (p.111)のみしか記録していない。

松村松年博士は1911年に“Erster Beitrag zur Insekten - Fauna von Sachalin”を發表され (Tohoku Imp. Univ. Jour. Coll. Agr. 4(1):120) その中で (p.381) *Osmoderma barnabita* Motsch. コアシナガハナムグリ (Shiraraka, gesammelt in einen Exemplare) と和名をつけて記録された。

Arrow, G.J.は1913年“Notes on the Lamellicorn Coleoptera of Japan and Descriptions of a few new Species”なる論文を發表 (Ann. Mag. Nat. Hist. 8, xii, pp.394-408) しているが、その中で *Osmoderma opica*, Lew.のみを記録している (p.396) (属名 *Osmoderma* は中性であるから種名は *opicum* にならなければいけない)。

1923年にいたって良く知られている新島善直, 木下栄次郎両博士の名著“こがねむしに関する研究報告 (第二)” (北大農学部演習林研究報告 vol. 2, No 2) が發表になりこの中で日光産1頭の標本で始めて図説をされた (p. 187, Taf. VI, fig. 6)。同時に松村博士が1911年に樺太産で記録された *O. barnabita* は和名の様に形は小さくなく脚は長くないものでありそれに該当する標本が北大昆虫学教室に無いことからどうもよくわからないむね記録しておられる。

1931年には松村博士の日本昆虫大図鑑 (刀江書院), 日本通俗昆虫図説, 第3巻 (甲虫之部) (春陽堂) が出版され夫々に本種が図説され“日光に産するも少し”とされていた。同じ年 (1931) 山本泰二氏は“昆虫” (Vol. 5, No 4, p.185-186) 誌上で“富士山麓パノラマ台, 赤城山, 富山県猪谷”の3ヶ所を新に報告された。

その頃よりこの虫が一般に知られるようになったと同時に新産地の発表も見erようになった。1937年には平山修次郎氏により青森県十和田湖畔産 (12-VIII-1935) が原色で図説された (原色千種昆虫図譜 pl.63. f.14, p.134)。1941年には同じものが原色で再図説された (原色甲虫図説, pl. 21, f. 14, p. 50)。

1939年には伊賀正汎氏によって本種の生態の一部が発表され幼虫, 繭の図説もされた (昆虫界, Vol. 7, No 66, p. 451-454, pl.294)。

戦後ではほとんどの図鑑類に図説されているし, 各地からの記録も多く発表されその生態の報文も出たりして良く知られたコガネムシになっているが依然として個体数が少ない種のようにでありその分布も広いとは云え可成り限定されているように思われる。

ところで東京に産すと記録されたことのある *O. barnabita* なる種は S. Schenkling の W. Junk Coleop. Cat. Pars. 75, 1922 によるとシベリア, 満洲, 北支に分布する種のものである (原記載 Bull. Moscou XVIII, 1845, I, p.58)。Medvedev の Fauna USSR Vol. X, No 4, 1960 には図説されている (p.387-389, f.990-994)。この分布表によると朝鮮にもこの種が

いることになっている (MedvedevはOsmoderma属5種を収録しているがその内3種について図説をしている)。

C. W. Kimの "Distribution Atlas of Insects of Korea" (1978) では朝鮮に分布しているのはO. opicumとしている (pl. 38, f. sc50b, p.379)。写真が今一つはっきりしないし記載も割合簡単なので真のO. opicumなのかO. barnabitaであるのか良くわからない(♂交尾器は明らかに異なるが前胸背中央の隆起, 頭部の隆起の形状も可成り異なる様に思われる)。やはりオオチャイロハナムグリは日本特産種と見るのが良いのかもしれない。

ユンクのカタログではこの属のコガネムシは8種が出ている。特にO. eremita (Scopoli) はヨーロッパに広く分布している種として良く知られている (筆者所有のチェコスロバキア産1♀を見た所ではオオチャイロハナムグリに比し前頭両側の隆起も小さく前胸背の隆起は2つなるもやや平たく著しく隆起せず平行で中央部外側に曲り, 基部近く若干緑色を呈し, 点刻は円形のものがやや大きく明瞭, 上翅会合線ぞいに明瞭な横皺状刻を密に有する。オオチャイロハナムグリの方はこのような皺状刻は僅かにして明らかに点刻を散布する)。北アメリカにいる2種について緒方靖哉氏が図説しておられるが (北九州の昆虫, Vol. 28, No. 3, 1981), こちらも日本産と良く似た形態をしている。

本種の生態に就いてはまとめて詳しく報告されたものはないが一応前記伊賀正汎氏 (1939) のもの以外に草刈広一氏の "オオチャイロハナムグリの採集と飼育" (昆虫と自然 Vol. 13, No. 5, p.22-24, 1978), 中山一氏の "オオチャイロハナムグリが羽化" (げんせい 38/39: 54, 1980) の報文によりほぼその生態がうかがえると考える。それ等によると場所によっては割合個体数は多いようであるが自然状態で採集となるとやはり少い種といった表現が当るようである。

一応今迄の記録を筆者の所有文献で拾って見た (多くの脱落はあると思われるが傾向はうかがえると思う)。同定も恐らく間違いはほとんどないのではないかと考える。

オオチャイロハナムグリの文献にあらわれた記録。

青森県十和田湖畔奥入瀬溪流地帯 (平山修次郎, 虫の世界 1936, 1(5/6): 17)。三戸町 (渡辺福寿, 森林動物相調査報告, 第一輯, 1937, p.95, pl. 24, f. 49)。上郡 (上北郡) 塩釜 (岡野喜久磨, 東北昆虫学会報告 5: 19, 1948)。

秋田県八幡平 - 焼山 (中山周平, 昆虫界 9(84): 113, 1941), 鹿角郡十和田湖畔鉛山 (東北昆虫学会々報 1(1): 28, 1946)。

岩手県盛岡, 区界峠, 平津戸 (竹内誠一, 岩手県甲虫誌, 第一巻: 117, 1940), 下閉伊郡門馬村区界峠 (村山 孝, 昆虫世界 50(574): 31, 1946)。

山形県飯豊山 (鍋越山), 朝日岳 (朝日鉱泉) (板垣輝彦, 山形昆虫同好会々誌 2(1): 6, 1964)。

西川町：中村。鳥海山：ソブ谷池。飯豊山：温身平。吾妻山：大清水（櫻井俊一，I. C. 13:21, 1984）。小国町温身平，米沢市日布高湯（草刈広一，昆虫と自然 13(5):22-24, 1978）。

宮城県鳴子町中山温泉附近（渡辺福寿，I. C., p.25, pl. 24, f. 49, 1937），桑沼（草刈広一，I. C., p. 22-24, 1978）。

福島県飯豊山麓（谷口 実，昆虫世界 37(2): 69, 1933），湯ノ花（草刈広一，I. C., p.22-24, 1978），平（虫同友会，虫の世界 1(1 $\frac{1}{2}$):81, 1937）。

茨城県（日置正義，1973 りぼし(1): 3），水戸市附近（テクラ 2(3): 53-54）。

栃木県日光湯本（虫同友会，1937 虫の世界 1(1 $\frac{1}{2}$):81。伊賀正汎，1939 昆虫界 7(66): 451-454），奥日光中宮向（河田禎二，1950，紀州昆虫 2(6): 150），奥日光外山沢（稲泉三丸，1972 栃木県の動物と植物：468-469）。

群馬県利根郡新治村法師温泉（平山修次郎，1936 I. C., 1(5/6):17。井口 宏，新村太郎，1938 虫の世界 2(2): 45），尾瀬沼～尾瀬ヶ原，武尊山（高島威男，1966 インセクト 17(2/3): 25），赤城山（山本泰二，昆虫 5(4): 185-186）。谷川岳，上野村（須田 亨，群馬県動物誌，p.337, 1985）。

新潟県（中根猛彦，越佐昆虫同好会々報，1950，2(2):65。本間義治，新潟県昆虫図鑑，下：56，1982），北蒲原郡菅谷村大字上石川地内（500m alt.）（小池 寛，1954，新昆虫 7(13): 27），Echigo:Kamiiishikawa（中根猛彦，馬場金太郎，1960 長岡科学博物館報：8），湯沢町八木沢（山屋茂人，1984 長岡市立科学博物館研究報告(19):24）。

埼玉県廬坂峠白岩山（斉藤良夫，1978，埼玉県動物誌：227），大滝村大輪（小田 博，1985，寄せ蛾記 (44): 602）。

東京都奥多摩（平山修次郎，1936 I. C., 1(5/6):17），青梅市御岳附近（森 祐二郎，1970 昆虫と自然 5(3): 17）。

神奈川県箱根明神ヶ岳附近（佐藤勝信，神奈川虫報(19):108，1966），小田原：箱根，明神ヶ岳，丹沢，丹沢山（平野幸彦，1981 神奈川県の甲虫：296）。

長野県（信州昆虫学会，1979。長野県昆虫図鑑下：132），武州御嶽山（瀧島繁次，1938 昆虫界 6(56): 812）。

富山県猪谷（山本泰二，1931 I. C., 5(4): 185-186）。

福井県大野市：下打波。池田町：冠山。今庄町：夜叉ヶ池（佐々治寛之。斉藤昌弘，1985。福井県昆虫目録：121）。

静岡県富士山麓パノラマ台（山本泰二，I. C., 5(4): 185-186），二軒小屋（水野弘造，1968 すずむし 17(2): 53）。

愛知県三河川合（穂積俊文，1958 佳香蝶 10(34): 7.，佐藤正孝，穂積俊文，1984 愛知の昆虫

:191)。北設楽郡設楽町段戸裏山(松野更一, 1984 三河の昆虫(30):151)。

岐阜県槍平(水野弘造, 1968 I.C., 17(2):53)。

三重県平倉演習林(山下善平ほか, 1968 三重大学農学部演習林資料(1):60)。

滋賀県愛知郡角井(井狩正二, 1940 昆虫界 7(76):424)。

京都府京都市愛後山(数井郁二, 1954 新昆虫 7(13):27)。

奈良県春日山(西崎正夫, 1947 南大阪昆虫クラブ 1(5/6):8), 柳生街道(中山正成, 1963 大和の昆虫 1(1):37), 伯母子岳(山本雅則, 1979 Sakaiensis 16(2):143)。

和歌山県高野山(安藤貞一, 1939 昆虫界 7(68):625), 高野山奥, 院廟前, 伊都郡高野山不動坂 600 alt., 日高郡城ヶ森(護摩, 壇山上) 1000alt. (後藤 伸, 1950 紀州昆虫 2(3):120), 護摩ノ壇山(梅本 実, 1983 KINOKUNI (24):14)。

兵庫県神戸市住吉, 岡本, 養父郡氷ノ山, 美方郡扇ノ山(高橋寿郎, 1981 てんとうむし №7:25, 1983 きべりはむし 11(1):26)。

鳥取県伯耆大山(荒木東次, 1933 昆虫 7(5/6):274. 高橋寿郎, 1939 虫の世界 3(5/6):93, 1939, 昆虫世界 43(508):362. 好本 精, 1942 昆虫界 10(105):731-732)。

水野弘造, 1969 すずむし 17(2):53, 東 正雄, 1971 京阪神の動物:160-161. 松村雅央, 1979 すかしば(11):21)。

広島県山県郡樽床, 奥三段峽(中村慎吾, 1966 比和科学博物館研究報告(10):9), 山県郡筒賀村中筒賀井(渡部泰明, 1969 広島虫の会々報(8):9), 宮島・大元公園, 樽床, 奥三段峽, 筒賀村(小阪敏和, 1971 広島虫の会々報(10):335), 宮島, 十方林道, 筒賀, 樽床, 奥三段(中山清隆ほか, 1984 広島虫の会々報(23):133)。

鳥根県匹見町広見(児玉 洋, 1984 すかしば(22):12)。

香川県多渡津南町野鹿ノ池(コガネムシ, 1939 虫の世界 3(1/2):28, 矢野俊郎, 1961 松山昆虫同好会時報(16):19)。

徳島県大竜寺山, 加茂谷, 剣山(剣山, 見ノ越)(東祖谷, 名頃), 石井町, 加茂谷村吉川(矢野俊郎, 1961 I.C., (16):19), 剣山見の越近辺(長尾 悟, 1972 月刊むし(16):19)。

愛媛県面河溪, 皿が嶺(矢野俊郎, 1961 I.C., (16):19)。

高知県土佐黒尊(草薙忠明, 1936 昆虫界 4(27):302), 三木 杭(矢野俊郎, 1961 I.C., (16):19), 香美郡物部村笹越(中山絃一, 1980 げんせい 38/39:54)。

福岡県英彦山(土居義金, 1956 北九州昆虫趣味の会々報(4):12. 神谷寛之, 1959 彦山昆虫目録Ⅱ:24. 松田勝毅, 1960 北九州の昆虫 7(3):94. 山脇好之, 1960 Worm Ship №49:1-3, 今坂正一, 越智輝雄, 1980 北九州の昆虫 26(3):121), 障子岳(天野昌次ほか, 1963 北九州の昆虫 Vol. 10:12), 九重大船林道(緒方靖哉, 1977 北九州の昆虫 24(2)

:50), 英彦山, 障子岳, 深倉峽, 若杉山, 古処山, 熊渡山(高倉康男, 1978 生物福岡(18):28), 大官山(有江敬助), 1982 北九州の昆虫 29(1):53).

大分県由布院町山下池附近(大塚 勲, 1969 甲虫ニュース(7):3).

長崎県平戸島安満岳(松尾照男, 1982 北九州の昆虫 29(2):90).

宮崎県霧島山燂(磯崎恵明, 1968 タテハモドキ(3):34. 清水 薫ほか 1969 霧島山総合調査報告書:264).

熊本県八代郡国見岳(土居義金, 1968 北九州の昆虫 14(3):89), 市房山(大塚 勲, 1968 甲虫ニュース(3):3), 椎矢峠・五家荘(仁田尾), 市房山, 八代郡泉村二本杉(栗田琢也, 1985 熊本昆虫同好会報 30(2):16).

鹿児島県屋久島(三宅純男, 1971 月刊むし 1(2):35. 中根猛彦, 1984 屋久島原生自然環境保全地域調査報告書:60), 屋久島ウイルソン株~高塚小屋(加藤泰久・豊島亮司 月刊むし(136):37).

以上全国的に見てほど満遍なく分布している種なのではないかと思われるがやはりブナ, スギ, カエデなどの空洞にいると云われている様に幾分高地性で東北地方には割合多く産する種ではないかと考えられる。

兵庫県下でも戦前から色々と話題になったが氷の山, 扇の山には分布している種で, 近くでは伯耆大山に多いことは良く知られていて中国山脈には全体に分布しているのではないだろうか。また摩耶山あたりにもまだ元気にいそうに思われ(県下中間帯に全く記録の無い特異な分布をしている種でもあり)開発によってその生活は遂次侵されつゝはあるが, なんとか生きつゞけてほしいものではある。(DEC. 1985)

兵庫県のベニボタル(1)

(兵庫県甲虫相資料・169)

高橋 寿郎

日本産ベニボタルに就いては中根猛彦博士による名著“Fauna Japonica:Lycidae, 1969”でその当時までの日本産6族, 19属, 87種が詳しく解説された。これによって日本産ベニボタルの研究史も良くわかるし, 日本にいるベニボタルの同定も非常にやり易くなった。なおこの著では和名が全く使用されていないが同博士は同じ年“日本産ベニボタル科目録”を発表しておられるの